

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

2011 年

No. 5

2011年8月15日(毎月15日)発行

財団法人 日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info@jase.or.jp URL http://www.jase.or.jp 発行人 松本清一 編集人 本橋道昭
© JASE. 2011 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

第20回WAS国際会議報告 1
北丸雄二のニューヨークレポート④ 6
「ありのままのわたしを生きる」ために④ 7

今月のブックガイド 8
JASEインフォメーション 9

■第20回WAS国際会議報告

性の健康を保障する未来の鍛造 (Forging the Future of Improved Sexual Health for All)

大阪府立大学人間社会学部教授
WAS 性の権利監視委員会 (Sexual Rights Watch Committee) 委員長

東 優子

■はじめに

性科学(セクソロジー)に関する世界最大の組織 WAS (World Association for Sexual Health) の主催する国際会議が、2011年6月12～16日、スコットランド・グラスゴー市で開催された。第20回となる本大会のテーマは Forging the Future of Improved Sexual Health for All (あらゆる人々の、よりよい性の健康を保障する未来を鍛造する) である。「鍛造」という言葉に、かつて造船業が盛んだったグラスゴーらしさを感じられる。

余談になるが、ある友人が「いくらウェールズ出身だって自己紹介しても、日本人にはイギリス人と呼ばれるんだよね」と苦笑するのを聞いたことがある。スコットランド、ウェールズ、北アイルランド、イングランドは、共に英国(UK)を構成する「国」である。独立国家ではないが、エディンバラを首都



1451年創立のグラスゴー大学:「国富論」で有名なアダム・スミスのほか、これまでにノーベル賞受賞者を6名も輩出した名門大学

とし、独立した法制度・教育制度・裁判制度をもつ。サッチャー、ブレア、ブラウンといった英国首相とは別に、スコットランド政府首相もいる。

隔年開催される WAS 国際会議の初回は、1978年のローマ大会に遡る。世界5大陸には、アジア・オ

セアニア (AOFS)・アフリカ (AFSHR)・ヨーロッパ (EFS)・南米 (FLASSES)・北米 (NAFSO) が組織されており、WAS 国際会議のない年には、地域別の国際会議が開催される。来年、島根県松江市で開催される第 12 回 AOCS (アジア・オセアニア性科学学会) がこれに相当する。

会員組織である WAS には、国内の日本性教育協会、日本性科学会、日本思春期学会が団体登録している。このほか、WAS には個人会員として登録することもできる。

■ 参加者の輪郭

今回の参加人数は約 900 名で、前回のイエテボリ大会 (スウェーデン) が約 1,500 名だったことに比べると、やや寂しい印象は否めない。採算が取れないという理由で、3 日夜に予定されていたガラ・ディナー (祝宴) もキャンセルになった。各国の参加者との交流が醍醐味ともいえる国際会議で、こうした社交の場をなくすというのもどうかとは思いますが、今回の会議運営は私企業に全面委託されており、そこが決定したことである。

実は、国際会議を運営するためには数千万円が必要となり、赤字になることもある。そうしたリスクを回避するために、マネジメント会社が雇われており、そこが参加者データの分析もおこなう。以下は、開会式当日の朝 9 時から午後 6 時開始直前まで開催された、WAS 役員会議で報告された事前登録者データである。

国別では、英国 220 名、米国 89 名、スウェーデン 58 名、オーストラリア 55 名、イタリア 34 名、ノルウェー 34 名、カナダ 29 名、スペイン 27 名、オランダ 26 名、ハンガリー 25 名、と続く。日本から事前登録した人数は 18 名だった。

専門領域別には、臨床医 36%、学生 17%、看護師／ヘルスケア専門職者 14%、保健アドバイザー 9%、臨床研究者 8%、レジデント／研究員 7%、基礎科学研究者 7%、企業関係者 2%、となる。ここに性教育に携わる「教員」が挙がっていないのは、データを分析した会議運営会社が、そもそも項目として設定していなかったというお粗末な理由による。

一般演題で採択されたのは、口頭発表 29 本、ポスター発表 533 本 (内、101 本は演者によるナレーション付) である。領域別にみると、性医学 43%、ジェンダー 30%、産婦人科学 13%、エイジング 9%、となる。いかに性科学が学際的学問とはいえ、やはり「医学」が大半を占めていることがわかる。

ここで「エイジング」が目を引く。「高齢化とセクシュアリティ」は重要な研究テーマだが、この数字に反映されているのは、バイアグラの登場以降の、いささか偏ったトレンドである。すなわち、男性の性機能障害に関する臨床研究には製薬会社のスポンサーがつきやすく、臨床研究の本数が増えた。本大会では (ある程度の慣れたのか) さほど気にならなかったが、過去には、男性性機能学会と見紛うばかりに、領域バランスを欠く大会もあったほどである。

国際会議には興味がある人でも、言語の壁、参加費用の高さなどを理由に、参加できないという人は多い。世界的経済不況では企業からの寄付や政府助成金などもままならないが、今回もスカラシップ (奨学金) や「学生・看護職・教職の参加費 15,000 円」といった特別枠を設けるなどして、とくに「性の健康」が深刻な状況にある地域からの参加、若者、現場で地道な取り組みをしている人々の参加を促進したいというのが、WAS の願いである。

■ 開会式と「グラスゴー宣言」

午後 6 時からの開会式は、歓迎の祝辞や会長講演、特別講演、各賞の発表、エンターテイメントなど盛りだくさんの内容だった。英国人は几帳面な性格だと聞いていたので、時間厳守の司会進行を想像していたのだが、スコットランド人はどうもそうではないらしい。2 時間の予定を大幅に超過し、開会式直後のカクテル・パーティーが始まったのは午後 9 時半だった。

前半は、講演「英国 (UK) における性の健康事情」、スコットランド政府閣僚による祝辞、そして「グラスゴー宣言」という流れで、以下の本大会のミッション (一部抜粋、意識) が確認された。

- 性の健康の基盤が、性の権利 (これは本質的に人権問題である) にあることを確認する。
- ジェンダー、セクシュアリティ、性の健康に対す



開会式の様子:写真左から WAS 学術委員長アラン・ジアミ (仏)、WAS 会長ローズマリー・コーツ (豪)、グラスゴー大会長ケヴァン・ワイリー (英)

るアプローチが、ホリスティックかつ人権的になされることを維持する。

- 性の健康ニーズがもっとも高い人々に対して、効果的な介入が実践されるよう推進していく。
- 性の健康、性の権利、多様性の実現に向けて、個人的・職業的リーダーシップの強化を図る。
- 健康およびウェルビーイングをもたらす効果的介入についてのエビデンスを提供する。
- コラボレーション精神、チャレンジに対する敬意の表明、変化に対するオープンなマインドを大切にする。

「英国 (UK) における性の健康事情」を紹介したのは、国民保健サービス (NHS) 「性の健康に関する独立顧問委員会」の委員長である。NHS は、日本の厚生省 (労働問題は扱わない) に相当する。その内容は、開催国の抱える深刻な現状とそれに対する取り組みであり、本誌先月号 (2011 年 No4) の巻頭論文「10 代の妊娠のリスク・ファクター: イギリスの総合政策プロジェクト」とも一部重複するので、そちらもぜひ参照されたい。

講演内容もさることながら、個人的に印象的だったのは、演者および彼を紹介した「HIV と性の健康センター」所長の肩書である。日本の公的事業および公職で「性の健康」という文言が使われている例を私は知らない。実質的には似たような事業内容が展開されている場合でも、「エイズ対策」や「母子保健」、あるいは「生殖に関する健康 (リプロダクティブ・ヘルス)」といった文言が使われている。

WAS は 2005 年、それまでの「性科学」という看



Chizuko Ikegami

American Studies major at Tokyo University. First student at the Pacific Center for Sex and Society under Milton Diamond. Translator of over thirty books related to women's bodies and sexuality. Founder of PLACE TOKYO, an AIDS NGO. Visiting lecturer at Kelo University. Sexual health researcher. Conference organizer. Recipient of 2005 Avon Awards for Women and Ultramar Award for AIDS education contributions.

Ms. Chizuko Ikegami is a true pioneer who opened the eyes of the Japanese to the importance of talking and learning about human sexuality and sexual health. She has served as a bridge not only between the media/scientific community and the Japanese public, but also for Japanese sexologists/sexuality educators/advocators and international communities such as WAS.

WAS ゴールド・メダル (金賞) を受賞した池上千寿子氏を紹介したスライド (開会式にて)

板を下ろし、「性の健康」を掲げた現在の名称に変更した。その主な理由は、学会組織のミッション (使命) の顕示と、名称変更することによって期待される国際的・学際的ネットワークの拡大である。しかし、当然のことながら、名称変更に反対した人々もいたのであり、かくいう私もその一人だった。会長 (当時) らに「君には、世界の情勢が見えていない」と言われたことを思い出しつつ、「性の健康」を冠した肩書をもつ二人の講演を (内、ひとりの前職がソーシャルワーカーだったということもあって) 感慨深く拝聴した。

■ 性科学界のオスカーを受賞した、初の日本人女性

開会式後半に関して特筆すべきは、池上千寿子氏 (ぶれいす東京代表) のゴールド・メダル (WAS 金賞) 受賞である。WAS 国際会議で発表される各賞のなかでも、生涯にわたる性科学への顕著な貢献を讃える「金賞」は、ある受賞者に言わせれば「性科学界のオスカー (アカデミー賞)」である。過去にかの有名なキンゼイやマスターズ & ジョンソン、カーケンダール、故・朝山新一氏などが受賞しており、今回の受賞者 5 名には、「G スポット」研究で世界的に著名なビバリー・ウィップル教授 (米) の名前もある。

残念ながら、池上氏は事情により渡航を中止せざるをえなくなったため、同じハワイ大学太平洋性と社会研究所でミルトン・ダイヤモンド教授に師事した「妹弟子」である私が当日の代理を務めさせてい

ただいた。

これまでも、2005年エイボン女性教育賞、2009年アルトマーク賞などを受賞している彼女の業績を改めて紹介する必要もないと思うが、今回の選考理由は、以下のように紹介された。「池上千寿子氏は、人間の性や性の健康について語ること、学ぶことの重要性を日本人に伝えてきた、まさにパイオニアである。(30冊を超える翻訳本を含む) 50冊以上の単共著を通じて、医学・科学コミュニティと一般社会をつなぎ、日本の性科学・性教育コミュニティと国際的コミュニティをつないできたのである。」

感激と興奮の授賞式の後、開会式最後を飾ったのは、性科学界の巨人の名を冠した「ジョン・マナー追悼記念講演」である。すでに予定終了時刻を1時間近く過ぎたところで、長旅の疲れと空腹感を募らせた聴衆の表情には陰しさが現れていたのだが、登壇したケヴィン・フェントン氏(CDCのHIVエイズ・ウイルス性肝炎・性感染症・結核予防局の責任者)は、そんな会場の空気をもろともせず、「米国における性の健康に対する公衆学的アプローチ」と題した見事な講演をおこなった。

■ 日本からの参加者と一般演題

冒頭でご紹介したように、日本からの参加登録者は18名(内1名は、欠席した池上千寿子氏)だった。日本性科学連合(JFS)が主催した団体ツアーは、事前申し込みが10名にも満たなかったために中止となったが、私たちが事前に把握していた人数をはるかに上回る参加者に現地でお会いすることができたことは、嬉しい驚きだった。

以下に発表演題をご紹介します。英語のタイトルを意識したのだが、本人にはニュアンスの違いなどを確認していないことをあらかじめお断りしておく。

- 金賞受賞講演「HIVと性の健康：日本からのメッセージ」(おれいす東京・池上千寿子)
- シンポジウム口演「日本のトランスジェンダー現象に対する健康ベース・アプローチの罫」(大阪府立大学・東優子) ※シンポジウム「トランスジェンダー／トランスセクシュアリズムの心理・社会・文化的側面」
- シンポジウム口演「日本の文化的・臨床的文脈に



トランスジェンダーに関するシンポジウムの演者たち：左から、ヴァレリオ(伊)、東(日)、メディコ(スイス)、ベネスタッド(ノルウェー)

みる乳がん術後のセクシュアリティと親密な関係性」(獨協医科大学・高橋都) ※シンポジウム「乳がん後のセクシュアリティと親密な関係性」

以下はすべてポスター発表。

- 「婦人科がんの患者のセクシュアリティに関する看護師への介入効果」(鳥取大学医学部附属病院・山崎かおり、他2名)
- 「日本のスポーツ協会におけるジェンダー問題の現状に関する量的調査」(東京大学総合文化研究科博士課程・正岡美麻、他2名)
- 「配偶者を亡くした高齢男性とアイデンティティ」(大阪府立大学大学院人間科学研究科博士後期課程・中原由望子)
- 「妊娠期の性交頻度と分娩後のセックスレス」(神奈川県立汐見台病院・早乙女智子)
- 「10代におけるデートDV経験と健康被害」(大阪大学・山本ベバリー・アン)
- 「家族計画に関する日本人夫婦の知識と現実」(大分県立看護科学大学・林猪都子、他4名)
- 「妊娠期の性的関係に関する妊産婦雑誌の掲載情報」(大分県立看護科学大学・猪俣理恵、他2名)
- 「性的態度に関する医学的アドバイス：2010年に刊行された人気妊産婦雑誌の分析」(大分県立看護科学大学・乾つぶら、他2名)

なお、上記を含め、本大会で発表された演題の抄録はすべて、国際性医学学会の公式ジャーナルであるThe Journal of Sexual Medicine (Vol.8) に収録されている(オンラインで購入可能)。



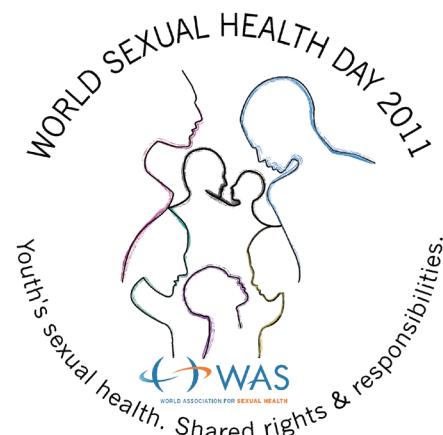
日本からの参加者：右から、本橋、高橋、飯藤、大川、早乙女、正岡、中原、東（敬称略）

■ 新しい出会いと別れ

本大会では、一般演題の他にも、各国の著名な研究者によるリレー講演 Meet the Expert（専門家と会おう）といったプログラムが、毎朝8時にプログラムされており、普段は学術雑誌やネット情報でしか知ることのできない研究者・実践家と交流する機会に恵まれた。こうした交流は、国際会議の醍醐味であり、とくにアジアやアフリカ、南米、東欧州など、英語で書かれた文献が少ない地域の情報を得るのに有効である。直接対話することで、文献では把握できない、問題の背景を知ることができる。

そういう意味でも、ガラ・ディナー（祝宴）がキャンセルになったことは非常に残念だったが、「万事、塞翁が馬」とはよくいったものがある。参加者らは各々、小グループにわかれてパブなどに繰り出し、逆にじっくり交流する時間が持てたという声を聞いた。私自身も、オーストラリアの団体に合流し、カーティン大学で開講されているセクシュアリティ教育課程の充実ぶりについて話を聞くことができた。

旧友との再会や新しい仲間との出会いがある一方で、本大会では突然の悲しい別れもあった。初日のWAS役員会議が終了した直後、元WAS会長マーク・ガネムが、開会式を前に心臓発作で急死したのである。性の健康に関するユネスコとの共同プロジェクトを立ち上げたばかりで、役員会議で熱弁をふるったのが彼の最期となった。フランスから家族が駆けつけるのを待ち、性科学界の旧友たちが見守るなかで、ユダヤ教式の追悼式が厳かに執り行われた。



世界セクシュアル・ヘルスデー（9月4日）のロゴ

■ 来年は、AOCS 松江大会

WAS 国際会議の第21回（2013年）は、ブラジルのリオ・デジャネイロ、第22回（2015年）はシンガポールで開催されることが決定した。隔年開講のため、来年はアジア・オセアニア性科学連合（AOFS）が主催する国際会議（AOCS）が島根県松江市で開催される。紙幅の都合で、グラスゴー大会の全貌をうまくお伝えすることができなかったが、少しでも興味関心をもたれた方がひとりでも多く、松江に足を運んでくださることを願ってやまない。

■ 世界性の健康デー

最後にもう一つ、WASの新しい取り組みをご紹介しておきたい。「世界における性の健康と性の権利の推進」をミッションとするWASでは、昨年（2010年）から9月4日を「世界性の健康デー」に定め、世界各国でのキャンペーンを実施している。2011年のテーマは「若者の性：権利と責任を分かち合おう」（Youth's Sexual Health: Shared Rights and Responsibilities）。

国内でも、横浜でトークライブ「愛とこれからの生と性～ちゃんと知っておきたい、オトコとオンナの事情～」(場所：横浜市社会福祉センターホール)、大阪で公開フォーラム「学校のなかの性的マイノリティ～教育現場における排除と包摂～」(場所：関西学院大学大阪梅田キャンパス)が、それぞれ9月4日13時から同時開催される。詳細は、本紙9ページ「JASE information」をご参照いただきたい。